

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



1280
12

三七全傳 古夢南柯後記卷之四

村田

第二編

池の中鳴乃上

東都

曲亭馬琴編次

因果観面の隣り。誰かこれをありがまんあれども。一旦の利小利れ慾小
あらひ不覺又禍胎を釀すとたへ長よ毒を続く。子孫その餘殃を
受く。又憐へ。されば赤根半六が妙に陽々領主の驕奢をなどりて。陰
小あのが榮利をもあら。米谷山より靈木を伐りし。その身桂小糸
なれども憂苦又横死せりのをもあら。一子半七。又流浪して。やれども
ある名を立られ。やうやく天日を覗く。更よ続井家の長臣となる。の
から。今亦罪ある罪を得る。うち歎くよ。あらねども。その子後の
羊をまく。墓あくも罪をまく。百折千磨の難苦を経て。縁故

をたばねき。そと親のあられ。忠義のあと。お正月
は。僕どやゆく根岸へ進る。その夜す。岩屋村ある。村長が
宅ア。ひめたす。守の金を支えあらし。翌日をはとめ。農夫
まさらら。山樵木を石集合。木精塚を覆ふ。風流士の宝刀をとり。牛と
いさぎを。一村の戸毎ア。令す。更闌入定ア。後單身留
る。米谷ア。ありしき壯き切口。君を諫えよ。めらせん。と。ひ
く。豫ア。一封の遺書を懷ゆ。たゞぐ。途ア。あくと
たる後者ホ。が。私平丹三が死體を歸りてまく。そのとがの
よ。ひと置く罵るほど。春の夜。よきが短くて。冬の外。小
天ハ明。皓處。米谷の麓。ある。獨夫ホ。羊之進が旅館。小来て。言
す。僕。も近属。米谷。小坂火。あり。夜。彼山。小登る。とせざしが
昨夕。丑三も過だらんと。山風。吹起。て。山の振動。くわ
か。そらう。どり。も。う。それ。人も。枕安。く。り。も。寝ら。と。只。宿
明月。を。宿。宿。絹。を。裂。裂。が。死。音。と。屋の棟。ちく。穴。え。た。よ。竹
き。ん。と。そ。あ。そ。り。紙窓の隙。も。と。れ。を。え。る。に。一條の妖火。西。投
ア。赤。失。ひ。ひ。れ。甲。夜。小。村。長。う。り。令。あ。ら。ー。た。う。り。の。せ。ひ。め。り。を。逐
と。米。谷。あ。る。木。精。塚。の。ほ。う。り。よ。ゆ。れ。す。る。よ。塚。ハ。掘。覆。ま。て。唐櫻。す
の。物。打。碎。り。た。あ。り。又。そ。の。傷。二。挺。の。鋤。鎗。あ。り。裏。の。せ。一。次。人の。所。る
う。縁。由。ハ。あ。り。ひ。ひ。よ。ど。お。づ。ら。れ。ら。の。勢。を。告。あ。ら。と。ひ。よ。彼。处。う。直。
參。り。て。ゆ。と。述。記。五。唐櫻。の。碎。た。と。彼。鋤。鎗。を。進。ら。け。れ。ば。羊。之。進
大。紀。よ。暮。れ。そ。れ。み。づ。から。行。く。そ。ん。と。く。瞬。夫。木。を。先。よ。立。村
長。を。後。方。よ。後。へ。刀。を。腰。よ。挿。も。と。米。谷。山。よ。立。登。て。塚。の。壊。き

たるをえり。観獵夫ホガリヨは違ひ。つれとらふ事。風流士の大刀
の失たる。吉凶。りふとも量る。されど。辰巳櫻本の松原。ありしも
ひ。今又。小鋤。鎧。を捨。されば。人あり。その塚を。蘆をたつ。か疑ひ。臣
あうる。彼宝刀。むづから。矣。いと。走。また。りの。欲是。も。水。あ。冬。から。
彼妖火酒。を投。す。靴。失。たり。とい。よ。う。そ。再。す。尋思。する。よ。陰の
大刀風流士。大内殿の長臣。たる。陶晴賢が家。み。あ。れ。ば。陽の大刀。と。序
風流士。られ。を。慕。ひ。る。遂。す。周防山口。赤。ゆ。たる。よ。あら。ぬ。欲。推。量。を
り。と。ひ。決。め。と。り。ど。も。風流士の失たる。金。よ。ア。シ。ム。罪。被。至。ひ。う。す
禍。よ。あ。ぐ。や。こ。ぶ。君。を。異。よ。在。す。ぶ。元。未。願。よ。所。す。り。た。よ。は。あ。く。あ。り。
右。小。就。て。お。の。小。ひ。一。樹上。親。實。が。い。ひ。つ。る。す。り。を。著。明。け。れ。と。そ。す。く。よ
う。ら。も。騒。び。遂。よ。村。長。獵。夫。ホ。を。ね。す。山。を。や。う。ん。と。す。よ。地。ひ。と。べ
小。物。の。倒。く。音。地。よ。響。く。ま。え。く。が。衆。皆。うち。驚。か。れ。つ。え。く。き。ん
彼。碑。石。よ。せ。ら。き。る。楠。の。断。株。が。あ。の。づ。か。ら。倒。き。う。こ。う。く。不。思。儀。と
それ。先。よ。走。り。く。う。そ。熟。視。と。石。よ。化。た。り。あ。る。新。株。只。一。夜。よ。朽。や。あ。え。
老。木。の。立。枯。で。り。如。く。西。の。か。く。倒。き。つ。幾。度。す。碎。た。る。現。未。曾。有。の
よ。う。れ。び。半。之。進。ひ。左。右。よ。ひ。す。と。か。ら。ぞ。碑。石。の。碎。た。る。を。ツ。ニ。ツ。と。り。り。に
ア。村。長。が。宿。所。よ。帰。る。と。丹。二。が。亡。骸。を。遁。れ。山。寺。へ。葬。ら。で。ど。く。ち。も。
米。谷。よ。怪。し。る。よ。ゆ。う。び。と。そ。く。平。城。へ。告。知。る。と。村。長。よ。聞。え。あ。れ。ば。
後。者。ホ。を。わ。す。第三。日。の。亭。牛。よ。平。城。へ。ゆ。り。小。り。ん。び。す。じ。蟻。松。曾。冬。郎
か。あ。り。つ。る。り。と。密。よ。告。が。の。が。宿。所。へ。ゆ。り。入。ら。で。あ。そ。君。所。へ。參。の。風。流。士
の。大。刀。の。失。た。る。又。木。精。塚。の。ひ。の。づ。く。倒。き。つ。碎。た。る。う。を。ぼ。え。重。
件。の。敗。唐。樞。と。鋤。鎧。と。碑。石。の。碎。た。る。を。見。せ。ま。わ。す。小。伊。賀。久

順勝。その鞍を手を審み丈す。一トよびへ取る。一トよびへ疑ひ恵比古は
怒氣をあらわす。局录ふす。腰立き。手をれ手之進木精塲の
碑石。原是楠の断株されば朽て倒る。手のめぐべ。件の大刀の失たる
と。ふれ全く汝が虚言すらん。せりふに汝も曾太郎と同意す。予を
諫んとひらひらぐら。言の用ひり。がらん。うをありかよ。二言も争ひを却
曾太郎を狹し。順勝を賺して。との結構をうながす。曾太郎と面を
うろこと。うろこを匿す。うろこ諫なれべ。汝の弁便す。そ
主を欺く。その罪決して許さがす。と纏懸アリたまつ。怒ふる堪シ
さん。佩刀の鞘スカサハをかりて。拳も棄べて罵ハラハラをあへ。當下順勝の内室
玉枕御前。殿のひて。敦園ゆの声の生平。さらぬが公りとく。か童タチ。
えとあれとぞ遣らひ。あうげらす。やがてさくらう。如些こと。鞍知る。常

えの出で。あづぬ。遠侍のこゑこまを。坐ゆひつ。正廳の廊小身を漏ルす。の
すを。坐スて坐ス。アリ。目今順勝の怒。堪シと。刀の鞘スカサハをうけ
あふを。爾窺て。吐嗟ハラハラと。走ハラハラと。半之進を後方
小聞て。右手を著。こぶ君ハシマ。怒を押す。からへが。やまうす。を。ゆ。右せ
君の。かん。憤ハラハラ。よ。れども。の半之進。半七たり。當初君の。かん。憤
を。お。の。負。そ。百折千磨の。艱苦を。経。よ。り。の。よ。ほ。ら。ざ。や。加藤家の家
う。わ。く。の。こ。う。り。圓豊ハラハラ。民安ハラハラ。被ハラハラ。切。作。め。れ。あ。か。よ。一。ロ。の
宝刀。よ。ひ。く。え。と。ま。づ。か。ら。解。よ。葉。の。世。の。識。人の。呼。す。今。眼前。不
が。如。り。ん。只。舊功。伐。か。だ。一。石。せ。く。れ。と。柱。ア。詩。き。せ。ゆ。か。と。言。諫。正。く
い。ま。ら。が。烈火。の。や。を。順。拂。む。當。然。理。よ。め。あ。と。只。疾。視。て。坐。せ。が。幸。す
す。そ。そ。徳。よ。復。ま。つ。扇。を。審。た。て。拘。う。肩。だ。人。が。の。始。わ。り。う。終。

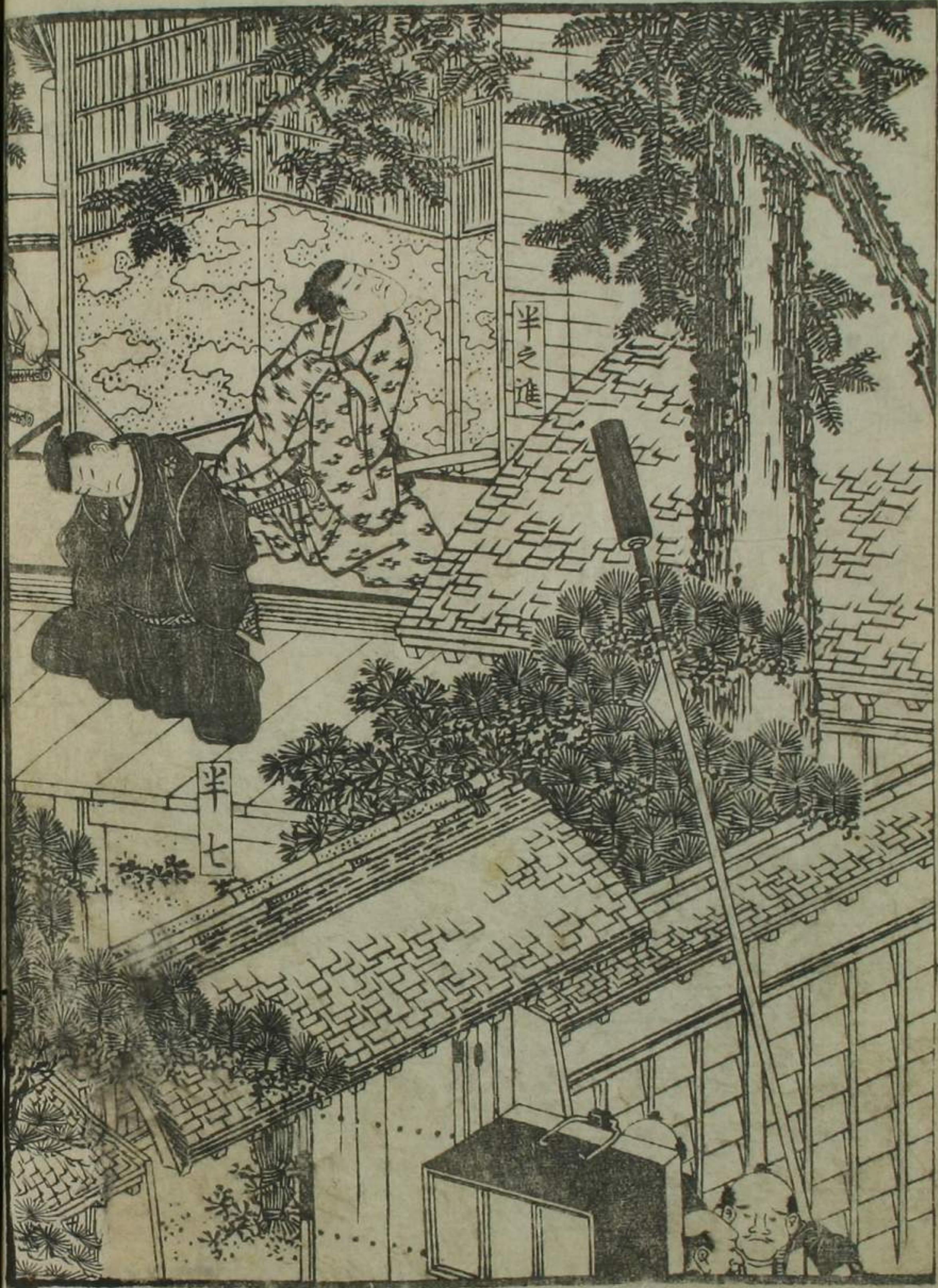
ありの稀。渠奴が父半六を編蓬の中うり獲跡て五條の縣守を
うりあつ。渠奴は近臣の列よ入るこう。とく名を取り。家を與
えと呂いふ。予が僕を補ひもうちうん。今よ至りて渠奴既よ家の事
たれづち不そりも不足す。ことをり。權を賣り主を薄る。そのひざ。
豈ちぶの如くうらんや。此度の罪へ決して免げずと云ふ。玉枕が
之所も又黙止まつ。宿所は西籠主て用籠主再びの不知を等。罷り
立まし。呵くまゆ。半之進へ唯をうて。撫てちん前を退ひき。ひとき
蟻松曾太郎。半之進がり公りとす。殿の御氣色づふをうまむらんとて。
渴み遠行す。その内体を洩ます。ひく胸苦い。ひく移す半之進
ひ憲ひ退せよければ。やぶれを放びゆえうどする。傍よ人馬にしき。
半之進ハ顔よ嗟嘆し。風流士の宝刀紛失したれ。吾脩愁み米谷あく。
自殺すふうり。阿容とゆじか。罪被らんと元未覺悟のうす。
り只今殿のあんま縛ふるうんよ。孤忠の趣を書遺ぢ。一封懷より。
ヨブ君これを齎さば。すすめ曉かひく。宝刀の立地よ。ひ絶ゆうとも
あるべから。玉枕御前のとどめさせのみをり。ひくの一度から。
ひくからふるじ。風流士の失たる。吉凶定めやくけれども。ヨブ君愛
情のあひを絶ゆう。禍の禳ひが。あんこれえゆ。とひく。
懐ふまをうへ入り。彼送書をふね扱ふよ。行處へ遺だけん。終ふえだ
殿のあん前へ。まふ。懐ふあひとひく。物を。り。彼處へや遺だ。今更ふ
彼一封をそくられ。まうらへ。実ふひとのあゆへ。さあくからうつ。詭歎ふ
とのこと。名め。こ。柄をうたふ。まうけま。と殊更よ周草を曾太郎へ
事の題をす。且く尋思り。赤根ゆ。まみ。森ひまみ。邊必死

を究めあぐ。そのより稱ぞ。後又仰あふも。稀うる忠義を皇天の憐み
あふかあるべ。ちくらへ今ちくらへと。殿のあん前へ送たる一封ハ猛き
川を渡とれる。とがとくらんもあらベク。長途の勞きを推量らる。二倍
半七園花母よも苦ノ。極つむらん。退アリ。と慰せ。半を進ミ
ちくらる。宝刀を杖よ身を起し。人間萬事塞翁が馬。吉もすと定ね。が。
内にゆくとひが。タのうまうれい。閉居の罪人安危理乱を勤す。
君を補佐。とくあづれと。ひくゆゑ身を外。主のそらの忠臣の
言の禁せぬとあづれ。さる程よ三勝園花。半七平作。父小後ひ。
米谷へ赴けたり。私平奴隸か物かうり。事のそらへあつ。殿の心
り。氣きへり。小坐もらん。と家公の恙。疾退り。かへり。と君所のりを
うち瞻仰。へり。と宿院たる。小羊を進ひ。と憂る氣色も。と罷上り
ふくれ。妻も子共も。そのよどり。小園居。と。と向かあれど。只不
程をびひもあらせ。宝刀の失だ。と。後者ホ。よ。ほらん。と。解不
よう。勘氣を鬻。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
を仰られ。と。平作。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。園花。と。と。と。と。立。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
宿所へ立入。と。と。と。の。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。
と。
と。
と。
と。
と。

ふくれ。妻も子共も。そのよどり。小園居。と。と向かあれど。只不
程をびひもあらせ。宝刀の失だ。と。後者ホ。よ。ほらん。と。解不
よう。勘氣を鬻。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
を仰られ。と。平作。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。立。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。
と。
と。
と。
と。
と。
と。

さ。といが二猪を花も。りうともふ眉を顰め。うへひに相合橋も。とが
所天か拂はれ。全八蝶九郎ホ。親族あつて。年未終を費んと。著
窓つ移す損ト。すほ懲ど酒小芥谷す。宝刀を棄ひて家公を罪
隔うと講じる。まのあらざや。といだせもあへ。半之進ひうち吹き。
かうるをひきのりのう。彼全八郎蝶九郎ホ。妻子あり。すと。おん
うや親族あらがわ。渠奴ホ。犯せむ科重た。天が下の罪人あら。家
一万よ金を断とも。それを怨るよ。めらんや。とぞアヤカルと。屋よ
を。尾を附く。世間の習俗う。それから唱起を。うそと。を
へ思ふ。再びひも出づ。と氣色暴く。徳せ。寝皆有理と。を
きが。あれ疑ひ解か。かくて園花の卒作をね。宿町ふゆ。しが。
え。主君み。憲アマ。訪の。もあだ。半之進。三猪半七。ホ。親子三人
用。龍アモ。日光。だよ。ス。伏を。徑よ。妻も。子ども。あり。で。半之進。志を
あ。ぶ。風流士の大刀の往方を。あ。じ。世間明く。す。と。神。ふ。佛。
祈。の。又。せんす。も。あ。た。日を。あ。難。す。才。ハ。春。あ。り。ぬ。妻。も。う。れ。夏
廁。五月。セ。一日。の。あ。う。タ。よ。続。井。順。勝。ハ。長。臣。蟻。松。曾。太。郎。を。至。室。
す。赤。根。半。之。ノ。き。罪。あ。り。あ。よ。裏。小。推。蟻。あ。た。し。う。入。う。と。八。九。日
を。経。た。い。ち。れ。ど。も。風。流。士。の。大。刀。を。出。づ。告。と。そ。の。罪。を。糺。と。う。あ。り。
ど。も。玉。枕。が。理。あ。く。歎。を。諫。る。も。う。ろ。さ。く。渠。奴。が。舊。功。も。默。止。ぐ。あ。れ。ば。
格。外。恩。免。の。沙汰。を。加。え。け。ふ。う。改。ア。百。日。を。限。ア。彼。大。刀。を。お
さ。く。ベ。ー。あ。づ。れ。と。ど。も。と。ひ。の。外。よ。膽。太。き。老。奸。う。れ。バ。却。風。流。士。を。が。
渠。奴。グ。宿。所。へ。私。あ。た。た。欲。く。れ。も。又。あ。る。べ。ー。だ。う。と。孩。兒。半。七。と
人。保。と。ー。ハ。海。比。の。染。鳴。す。四。阿。の。裏。小。捕。置。ん。と。う。す。う。い。満。達。

豫うちうづの昔年先考北山ある。鹿苑院の金閣アノ擬ア。茶亭を
修造んとあはゞ。比後苑よ廣く池を穿らせて。山河を沃入れ。此
の中小二ツの茶嶋を造らす。一ツの嶋より弁天堂を建立す。又一ツの
嶋より金閣の茶亭を修造す。がつゝわどもき。閣をも亭をも
壊そ。今人僅小一字の四阿あり。且辨天堂への參詣のお橋をこじ
たれども。四阿へりて荒たるのと。彼嶋へ渡るべた橋す。うれり半七
を捕り。獄舎へ。の處よやうんと。あるべく。月小只二度の飯
を。小舟より運して。興きせよ。小膽の太た羊之進を。うとも親と
あくふを憐れらんや。ちびらんひもよ引き。被大刀を出を。と
あらん。ゆ。羊之進が宿所よかに向ひ。の音を。すえちらし。羊七を石
捕す。秋の如く。小ぢよりつめだす。私。の意。親子と憐
め。その罪業奴と同じ。うあべ。あくの如く。とも。百日を。じきだらり
過ぎ。そのとび。許へがく。羊之進が班白の首列らるべ。と信と
ひふこと。肩と肘とを。かみす。したす。暴く。仰する。小ぞ。
曾太郎。あまく。よ苛む。仰す。と。らひき。諫す。許さる。庵尼小
むらねば。己とを。ゆえ。羊之進が宿所。いゆにて。主命を。演説す。ゆがく
羊七を。引立す。うまうんとする。御よ三猪の夫のうへ。猶を苦しめ。
夜。う安らひ。もねられぬ。今。又。うぶ。羊七が因縁と。うるを。と。う
と。うみ。涙よ水。う。冊も。う。淵。小。變る。浮世を。嘲。の。蟻松。お
も情う。ねん身が。猶。よの。卒化。う。初花と。う。婚解。う。ん。小血脉
よ。あく。う。羊七の。姪。背と。う。名の。う。み。初花と。う。婚解。う。ん。小血脉
結。う。幸。よ。此方の。凋落。跡。う。う。腹。う。う。う。う。う。う。



子をうよ道よ迷ひてや。ひの簡よ打礫も。ハヤアアアア。恨のクゼ。
濱の真砂と尽るぬ名残惜シテテテと位曾太郎へ行つと。う
ど豫て半之進ケ。うろをあればとうもあり。半七今更不。母の
歎きの痛しく。ひと長サホ延けりし月額の毛を席薦に着。母あ
ひくふ歎たひそ。又因徒とありあら。ひづくうづく悲。あべれ小
親より代えゆるの道。や吾儕は火小焼毛水又侵され千万無量
の呵責小命を隕とう。二親より恙あく。よま中のまひう。半七
がみへ只らひ捨て坐す。終より君の怒も解。あくに日光をすある
日のあくべや。と慰まし。ニ勝ひと堪。もう落る涙を拭ひ
質くもすえあひ。がん身が志のまめめめ。辛く命をなすられ
今を昔小説るとも。手を先立て何からん。花の御池の中嶋ハ近く
アキラ配呼す。浪風小犯され。身を病。りゆうよ。二度
の飯や人の身を。約あがさむ。便あらん。あん身がひとり。篠島
物やふうりあよ居。ありひ身が胸苦。今の別れの哀れ
ふ。すうんとあらあら身を毛。赦免の手札をあらゆ。名残をう。
うれ口説袂。持てまく泣沈り。曾太郎もすきら。強顔ひた
ひあらりゆく。頻々歎息をしう。半之進をつと音を起。刀
の瑞突つれ。三勝を撲地と推退す。声をうす立前うしき。か
黙するをうたすして。さうめぐのう言字くもうさせ。日本へさ
も雄く。かりしがよそ。乱々女との思癡。蟻松ねのむがえ
も。推量られ。西がきう。女よ羊セ。これぞ。音あ生じ。口外
ちづこひきうね。母へまうす。うす。汝よ告あらせねど。か

此度の禍ひ。ふが廢城とろす。はも又父が志をうむあらが。親を
 タマ念とせば。主家の在異を祈るべし。うろぬたうや。うううろぬよ。
 蟻松ゆ。仰うすありひひぬ。いき羊をうろべ。うく立と呵ふ
 すを。目よ角つけ。目送れど。うろ共よ芝折る。せ日うあまの
 手菖蒲晴。とねありひの五月雨。湿りがらる黒衣えや。又うれ
 曇る三勝が。おのうれ雲を吹く。風の便りも翌うれ訪へば
 どうにこぶよの配所園の名よか。八海の池うれ深恩愛を。ひ
 くみゆ。曾太郎へ。羊之進よ目礼し。羊セを引立て。せても送るも上下の
 折目高き武夫の意地へかく。そやうれと感うれ赤根が私事も。又
 蟻松が後者も。共よ袂をわらへ。正是。

公道人情兩是非

人情公道最難爲

と賦へたうける。世謗をありのありべ。

若依公道人情欠

順了人情公道虧

比の中傍乃下

罪うきて。配所の月をうんとつひ。大宮人よ和歌の浦。船出も
 ちうね。僻言あらん。不題赤根半七。四罪うな罪と家大人よ。
 代るとぞくべじとせね。株も残ぐ秋風や。假初うづら九十余日。
 八海比の中傍す。四阿よ因えそ。う紙配所となつとりざも。
 うううき難い宿寝。柳九山八海の比と號え。へ當時
 鹿苑院の義満公。洛北よ金閣を造りし。退隱のだとほそ。山水の
 美景をうきさる。もうれよ永正のこどめふ至て。順勝の又続井順勝。
 無茶の風流と嘗むのあまう。彼金閣よ擬へて。三十餘町の後苑よ。

五町の堀を穿せ。堀の中より二つの源を築せ。これを鏡湖の
浦に擬へば中の奇石の夜泊石。龜山。赤松。島山。丸山。八海石。小
至るやうで。その面積をうつせり。又び八海堀と名づけゆく。
かく莊院とこそどり。驕とおせば身の仇。一家の難
い。でよみくして。順昭をしてその非を曉す。享禄二年の春のころ。
彼茶亭とが毀とされど。東南の築嶋ある。辨天堂と。堀の中傳
る。四阿の。そがよよ残れり。順昭えま。辨財天と。ふく
信と。さひ。彼築はふ。架する反橋をば。今順勝の財ある。
わく。後覆志り。北の縁より橋も。彼四阿へおづくら。
簷鼻傾き。蓋が棟も。只しくふ朽き。向う外ふり。のべ
袖の源と透間。秋風の。ぞ育つ。あるきの巻の松の声

時の羽がた。百羽がた。がきこゑ。それぬ。おぢいかる。羊七八頭。管
又の。う。母の歎き。づが家。よもあて。うち。樂。池の波風。鳥
とも。ふ君の怒の。よどがて。冠の籠居。ゆる。せり。と。遙。あるきの
築はる。辨財天を祈る。え。本懃。を苑。すねが。岩の樹立。よ
遮られて。中鴻。とうへん。新む。え。え。ど。只月の。己の。月。毎。玉枕。は前
内庭。傍ひよ。夥の女房。女の童とねて。毎天。堂へ。集。り。ま。ふ。を。
外。う。う。し。え。あ。ま。ど。憚。ア。やり。べ。端。ち。く。へ。と。だ。日。ふ。只。三。亥。の
餉。と。ぐ。管園。よう。奴隸。と。給。する。その舟。も。あ。ま。て。乃。宿。よ
か。う。ド。口。堀。の。中。よ。ぐ。ら。毎。城天。へ。ま。と。す。ほ。げ。ふ。近。く。て。遠。そ
り。の。鞍馬。の。九。わ。と。や。清。か。納。言。が。書。る。ぞ。宣。え。る。彼。首。よ



とんもり小舟をうち移す。身を繫りて因縁を近くて遙に神垣へ。
運へ哉もどうぬ候と形されせ紙印す。五月廿一日よりとてよあると
四箇月又餘りて。之を以て月日もあく秋の九月初日よりたる。
ある月の三日へ限を以て。百日より満ぬ家事へ恙をや坐を
らん。宝刀の往方をまくらる候。母はこそみちりひ不そひて。
病著すや卧りひきん。その膏肓をゆめと。どうぞうへ難事の
翅あけをばらぐて。家居の方とうち仰ぎ。又傍流めが水や空
空や水ある秋の雲。うるまよとあらかのが身の往方ゆくよ室免
かゆ。姨捨ひよあくねどり。照月見えぬ朔日ふ。何慰ん鍋物の
小ざしが枝のうち戻ぐ。夕くまつとも。公憂し。羊七倍とくらす
至誠の神の如くとくら。誠とりて祈りよがりて。御靈乃驗

さくらん。仰へゆ。辨財天女を念ぐり。猛烈不可思議大
智惠聚不可稱量福徳之報を得ん。と光明徑を獲をす。
うすりして二日が間よ又が越後を許されて。君臣和順をもん。
彼の舟と夜の中に。ごとく流れて岸よ著。御堂へまわきにあ
り。と毎夜よみ詠あうよ。垢粧を執て祈る。とつど。天女も
駆んせゆふ。とや三日ふうにされば。すせあく。手失ひこの
一ノ日つゝが文の生死の際よとくろぐん。特よくは己の身。
玉枕巾前の大天堂へ。まづりとくとく。これも又卒事のみ
ゆふ。又よん肚をくる。故母の何とえりもん。こへ何とせん
とぞく。とぞくに。宿邊よ立て蹉跎し。彼舟ごとく。寄せゆく舟ふく。
ゆく。抗て折りかひあたつす。かくとく吹く。鬼界の鷦よ法猪ちの

行後復寛が。ひとり華陪を慕ひて。憂身へねまどうひき。
さればすせひこの五七日。夜も通宵未だねば。勝斷と休勞れ。寝方
松が根枕みて。寝るともあらず卧りしが。夜風のそよと身入る。
驚かれて身を起せば。身へも暮を身光も。初更の比とお母へ見ゆ。
軍七ヶ孝心。天女納受をひく。彼首の峯ふ繫る舟のまづま
賛解してや。風もぬふすげれ来て。づつの程ふう鳴根ふわう。ま七八
此舟をよそ。ひづるに勇者さん。念願成就疑ひひと跳り葛て岡と
うちを。其れともちくぬ如法闇後。棹を操り水を搔。幸くして
無事。渡へ乗着て舟を峯ふ繫だ。久探りつぶふ登りて。天女の
船中よ詣るよ。神燈ひとつ暗けよど。湖上の月と仰ぐ。頬惱の
雲忽地雪寄て。圓滑の基すよむろた御く。信ひ併軒み徹して。

紀ノ眼

のひめ

むちく徳之助

喜久内

